
シノビックス

エア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シノビックス

【Nコード】

N9015D

【作者名】

エア

【あらすじ】

私は先月からこの公安特務課に配属となった者です。ここにある一冊の報告書。これは今から数十年前に書かれたものらしいのですがその内容は奇天烈なものばかり、「魔法」や「忍者」、「オールジュエル」と呼ばれる国家を動かす程の力を秘めた宝石等、まるでお伽話のような言葉が踊ります。本当は一般の人に報告書を見せるなんてことははいけないのですが、今回だけは特別です。貴方も見てみてください。この数奇な運命をたどり、世界すら救ったとある忍者のお話を。

一話（前書き）

魔法については講談社発行の
魔法先生ネギまを参考にさせてもらってます。

一話

午前2時38分51秒

日本海上空

一機の自家用ジェットが人知れず一路大陸へと向かっていた。

「しかし、今回の計画はうまくいきましたな」

機内から聞こえてくるのは2人の中年の悪巧み。中国人風の男はもう一人の日本人中年の手見上げに驚くばかりだ。

「しかし、開発中の新型戦車設計図や試作型重力波干渉制御装置等よくこんなにも用意できましたな」

「私はこれでも国防省で働いていたのだよ？兵器なんざいくらでも手には入るよ。それよりこれだけの物を用意したんだ亡命後の地位は頼んだぞ」

「わかっております。將軍閣下もお喜びです。地位も金も今以上に」

「そうか、そうか、グフ、グハハハハハ〜！」

二人が怪しい笑い声を発している頃、一人の人間がジェットの機体を張り付き、ヤモリのようにハッチを指摘していた。

「これより潜入を開始する」

インカム越しにそうつげると男はジェット内に侵入し、音を出す事

を忘れたように、仕事を始める。手慣れたように闇に紛れ、動き、機内の人間を迅速かつ確実に全て気絶させるとジェットを自動操縦、行き先日本に設定し、本命のもとへと向かった。

「なにか様子が変わらないですか？」

残り二人のうち、異変に最初に気づいたのは中国人風の男だった。ドアを開けても誰もおらず、護衛の姿すらない。

「・・・？」

不思議に思いつつも勝利の美酒に酔いしれて警戒心が薄れていた男は呑み直そうとドアを閉めた。

「どうかしたのかね？」

「いや、なんでもございませぬ。気のせいです」

男が再び席についた時、突如電気が消え男の記憶はここで一時途絶えることとなる。

「なんだ！？なにが、起きている！」

ただ一人残された日本人の男は突然の出来事に慌てふためき、室内が月光で照らされてすべての元凶が姿を表した。一言で言えばそれは忍者。

しかしその腰には通常の忍者が持ち得ない程の大野太刀を据えた漆黒の忍。

「誰だ貴様〜！！」

「公安特務課だ。後は言わなくても察しがつくだろう？」

「公安・・・く、っそ。ここまで来て公安ごときに私の夢を、酒池

肉林を邪魔されてたまるか〜！」

男が懐から銃を取り出し構えて打つまで約4秒、その間に忍の体は数メートルを跳躍し、男の首を一つトンツと打つ。

達人の前では銃も意味をなさず、日本人の男もたいした間もなく気を失った。

「こちら幸村、任務遂行」

耳から延びたインカムに作戦の成功を告げる。

「了解、悪いが次の任務が入った。これから3分5秒後にすれ違う飛行機に向かってくれ。最重要機密を空輸中に連絡がとれなくなつたおそらくハイジャックされたのだろエネミーを排除しつつ目標を確保してくれ」

「了解、しかし、この飛行機はどうするんです？自動操縦でも着陸は出来ませんよ」

「それは心配ない。すでに管制システムはこちらがハックし、操縦はプロに任せた。それより任務だ後2分43秒だ失敗は許されない」

「了解」

忍、改め、藤林幸村は突風吹き荒ぶ飛行機の船体中腹に立っていた。高度は一万フィートを超え、堆くある雲すらも眼下に納めるその場所に立てることじたいが既に超人。

一般人とはかけ離れたスペックを要する兵器だとわかる。

ターゲットは視認できる距離へと近づき作戦開始の時刻が迫る。

「3、2、1、作戦・・・開始」

幸村は体を飛行機の側面に置くとターゲットの飛行機目掛けて、飛行機のボディが凹む程の衝撃を残して飛び立った。

「縮地法、無^{むきよく}彊」

弾丸顔負けのようなスピードを維持したまま車すら弾き飛ばす突風すらも計算にいれ、風に流されながらも物理法則を無視したような神の御業により幸村は見事ターゲットに飛び移ることに成功した。

中に潜入してみて初めてわかるこの緊迫感。確実に何かがいることがわかる。

機内には敵と自分だけ。

「これは・・・」

わずかな痕跡を発見するも、それが数メートルおきに付けられている所をみるとわかる。

相手が誘って来ているのだと。

「ここか」

そしてたどり着いた一室からは自分と同じ達人の気配が漏れ出ていた。

「ようこそ、エージェント」

中に居たのは1人の青年。

瞬間、幸村は迷うことなく腰の野太刀に手をかけ、縮地、さらに敵目掛けて一線を放った。

空気を切り、時を断ち、闇を裂くその一撃はまごうことなき一撃必殺。

しかし、その微塵の手加減も人を殺すことへの抵抗も忘れた一撃は倒すべきを敵を捉えずに空を切った。

（これは、縮地法！？）

幸村の先攻をかわした青年は神速で背後に回り込むと呪文を唱え始めた。

「ギル・ギム・ラクリア・ドントラス・…盟約に従い火霊、我に燃え上がる灼力を、フرائم・デユコス！」

（なんだこれは！？）

青年の手から飛び出した巨大な炎の斧は幸村を捉えた。

「クソ、！」

幸村に炎の斧が直撃しようとした瞬間、一枚の呪符を取り出し、それで一瞬、炎の斧を防いだ隙に縮地法によりなんとか回避に成功した。

「すばらしい。その歳でここまで縮地法を使いこなす人間を初めて見たよ。名前はなんと言うのかな？」

余裕の笑みを浮かべる青年に対し幸村は、野太刀を構えたまま真剣な顔つきで青年を見据えていたが内心では何がどうなっているのかわからない状況。

混乱状態に陥っていた。

「なんだ今のは・・・？」

手から炎の斧をだす人間など裏の世界にいる幸村ですらみたことのない技だ。

「おいおい、質問に質問で答えるとテストでは0点なんだぞ」

物腰は柔らかだが体中から血の匂いがし、その笑った目はどこか冷酷さをうかがえる赤と黒のオッドアイ。

「もしかして魔法を見るのは初めてか？」

「魔法だと？」

「そう魔法だ。あるいはmagic、witchcraft、sorcery、wizardry、呼び方は色々あるが全ては一つを指す。それが魔法。つまりオレは魔法使いだ」

いまだ信じられないという顔をする幸村の顔を見て青年はフツと笑い、

「ギル・ギム・ラクリア・ドントラス。風の精霊11人縛鎖となりて敵をとらえよ」

再び呪文を唱えた。

一瞬消えたかったと思うと次の瞬間には幸村の背後に、その手は背中に押し当てられていた。

「実際に体感するのが一番はやい。サギタマギカ・アエール・カプトウーラエ」

幸村の体をいくつもの風を束ねたような帯が捕らえていく。

「身動きがとれない・・・！」

風に捕らえられた体は、指一本動かない硬直状態だ。

「いやゝまったく君が来てくれてよかったよ。オレが取りに来た品が見つからなくてな、運んでる本人達でさえ知らないらしいんだ。だが、オレを殺しにきた君なら知ってるんじゃないか？」

「そんなの知るか、」

「ホントかよ？」

不用意に顔を近づけてきた青年に向かって幸村は口に隠し含んでいた小型ナイフを吹きかけたが、ナイフは青年の顔をかすめて落ちていった。

「流石に忍者どこに何隠してるかわかんない」

青年の笑顔の次に向けられたのは常人離れた威力の拳だった。腹部を的確に捉えたその拳に、強化外装を身につけた幸村すらも尋常でないダメージを余儀なくされた。

「魔法使いに嘘は意味がない」

青年が幸村の頭に手を乗せた瞬間、次は頭の中をかき混ぜられるような不快感が幸村を襲う。

「ぐああああああ！！」

「おいおいホントに知らないのかよ。仕方ないなあこれ疲れるからやりたくないけどしょうがない」

青年は少し精神統一すると拳で床を殴りつけた。

しばしの沈黙のうち青年は何かを見つけたらしくどこかえ行き、帰ってきた時には一つの小箱を手を持っていた。

「これが欲しかったんだよ」

青年はいまだに縛り付けられている幸村に箱の中身を見せた。
それは一見ダイヤモンドのような形をするが、その色は純黒。光が
吸い込まれていくようにすら見える黒だ。

「ギル・ギム・ラクリア・ドントラス。大気よ水よ白霧となれ彼の
者等に一時の安息を眠りの霧」

「待て・・・」

どんどん意識が薄れていく中幸村が最後に見たのはイラつく笑顔
で窓を割り、外へと飛び立っていくヤツの姿だった。

二話

幸村は建設中のビル群の中にいた。

闇夜を風のように駆け抜け、走る幸村の後を三人の敵が追う。

「ターゲット確認、コレヨリ中距離間戦闘シミュレーションヲ開始スル」

機械的な音声の後、三人の敵はそれぞれ散開。真ん中の1人が幸村めがけてマシンガンを乱射、それを野太刀で10、20と全て捌くと左右から敵が二人いっぺんに超振動剣で切りかかってきた。

超振動剣は武器破壊の武器。通常の物質は触れただけで破壊切断されてしまう。

それを紙一重でかわすと、一人を太刀の峰を首に引っかけマシンガンを乱射している敵に投げつける。

残った一人の剣が何度も幸村に襲いかかるが全てはかわされ、かわす幸村はどこか怒りに燃えていた。

「このド畜生が!!」

一人を左正拳突きで殴り飛ばし、三人をまとめると縮地で一気に距離を詰め、愛用の野太刀で三人をいっぺんにぶった斬る。

「シミュレーションコンプリート」

息を荒くする幸村の周りの空間がどんどん剥げてゆき、その向こう側には研究室のような景色が広がっていた。

「ブラボーブラボーやるなあ幸村」

「伊都織、なんのようだ」

幸村の視線の先でコーヒーを飲む赤髪赤目の派手な容姿をしたこの男の名前は伊都織 遼平幸村と同じく公安特務課のメンバーであり情報収集から武器取り扱い、戦闘、何でもござれの性格以外はオールマイティーの同期である。

「いや、あの幸村が任務をしくって課長に謹慎くらった腹いせにVRルームでAIたこ殴りにしてるって聞いたもんだからちよっかい出しにきたのさ」

今いるこの研究室のような部屋は公安特務課にあるVRルームだ。
バーチャルリアリティ
体内にあるナノマシンを使いあたかも現実にある光景を再現できる未来のシステムである。

「オマエといるとム力つくから帰る」

タオルで汗を拭い自分の部屋へと帰ろうとすると伊都織が邪悪な笑みを浮かべながら近づいてきた。

「まあ待てよう！そんなにふてくされんなよ。魔法使いさんに頼んで課長しめてもらえばいいんじゃないか」

伊都織の魔法使いという言葉に幸村は睨み殺すような鋭い眼光で振り返った。

「てめえ伊都織、切り刻まれてえのか!？」

「おゝ恐い恐い。助けて魔法使いさ〜ん」伊都織は両手を広げ、バカにしたような声を出しながら走って行った。

「チッ、」

幸村の舌打ちが機械のモーター音にかき消されていく。

今から三時間ほど前・

「藤林幸村、入ります」

幸村が一礼して入って行ったのは課長室。
頭をあげると課長はヒドく落胆したような顔をして幸村を見つめていた。

「藤林、今回私はオマエほどの人間がわけもなく任務を失敗したとはとても思えないし、失敗したことによってどれ程に不甲斐ない気持ちでいるかもわかつているつもりだ。しかし・・・」

課長は幸村の出した報告書を疑いの眼差しで見ている。

「この魔法使いというのは一体なんだ？嘘をつくにはあまりにも幼稚でありえない」

「しかし、オレは見ました確かに・・・ハイジャック犯は自らを魔法使いだと名乗り、実際にこの眼で魔法もみました！」

幸村は真剣に包み隠さず全てを報告書に述べたがそのどれもが書いている自分でも信用できないような非現実的内容だ。

課長はすぐそこまで出てきている怒りを飲み込むと幸村に一枚の紙を差し出した。

「謹慎命令だ。オマエも疲れているのだろう。これで少し羽でも伸ばして休んでこい」

「しかし、オレは確かにみました。魔法を、魔法使いを」

必死に説明しようとする幸村。この謹慎処分は魔法というありもしないものを任務失敗の口実にしようとした偽証への処分だから考えたからだ。

「これは偽証に対するものではなく任務失敗に対するものだ。わかってると思うが組織において失敗は許されない。通常なら記憶を消してクビにしているところだ！それほどにオマエが敵に渡してしまった物の価値は大きいのだ・今回はオマエの能力に免じて謹慎ですんだのだ大人しく受け取れ」

「くっ、・・・わかりました、失礼します」

課長室から出てきた幸村はこみ上げてくる悔しさに唇を強く噛み締めた。

三話

あれから三日たつが幸村の謹慎はいまだに解けず街をぶらぶらと散策する日々が続いていた。

幸村の年齢は19歳。あと一ヶ月もすれば20歳の少年から青年になる年だ。

街を行き交う自分と同年ほどの若者たちは思い思いの格好をし、親しき友人や恋人と買い物や遊びを楽しんでいる。

「ソフトクリーム、バニラで」

幸村は一つソフトクリームを買うと誰にも気づかれないようにこちら辺で一番高いビルの屋上、貯水タンクの上まで跳んだ。

昔は甘い物を食べるなんてことは数ヶ月に一度しかなかった。

幼い頃から祖父の下、修行に明け暮れ、たまに街へくると色々なものが珍しくて、街を歩くことやゲームセンターがただ楽しくて、ソフトクリームやファミレスの安い料理がただ美味しかった。

横に大の字で寝転がると、沢山の大きな雲が風に流されているのが見える。

その中の一つがああ魔法使いに見えてならない。「あゝクソムカつくぜー」

ムカつく笑みを浮かべたような雲に思い切り気合いを込めて近くに捨て置かれた空き缶を投げつけるも、当然のように風に流されどこかに飛んでいってしまった。

（やっぱ魔法なんて夢だったんかな、VR訓練し過ぎたせいでノマシンがおかしくなって在りもしない映像を見せられていたんかな）

特務課の情報室に聞いても世界中のどこにも魔法や魔法使いの記録はないと半笑いで言われた。

「これで戻ってもしばらくは頭おかしい人って思われるか任務失敗を空想のせいにしたチキン野郎としか思われないうな」

さつき流された空き缶を力無く眼で追っていると不思議なことが起きた。

幸村の目線より少し上の所、100メートル程先で缶が何も無い所で跳ねたのだ。

しかも、

「痛っ！」という声までした。

「・・・？」

違和感を感じた幸村はその周辺を食い入るように見た。すると、微妙に空間が歪んでいる所があり、確かに何か人間大のものがそこにいるのだ。

それは一定スピードで飛び、どこかに向かっているようだ。

「なんだありや？」

不思議に思った幸村はその後を気配を消して追い始めた。

たどり着いたのは街外れの教会。

夕焼けが辺りを美しく彩る。

とりあえず中に入ると幸村の他に三人の人間が座っている。老人が二人に若者一人、幸村は教会独特の長い椅子に座ると辺りを見回した。

あの謎の物体はここにつくと同時に教会の中へと消えていった。きつとこの中に秘密があるのだと探っているのだ。

しばらくして幸村がウトウトし始めた時、教会の扉が勢いよくあいた。

「うわああああん、シスター」

一人の子供が頭に大きなタンコブを作って泣きながら現れ、その大声を聞きつけたかのような現れたシスター。金髪碧眼の白人シスターその口からは。

「まあまあこんなに大きなタンコブ、どうしたのですか？」

思わず二度見してしまうような流ちょうな日本語が飛び出した。

「木から落ちた」

「それは痛かったですね。今治してあげますよ」

聖母を思わせるシスターの本当に驚くべきはこの後だった。

「ラス・テル・ビギ・ナル・アリウテス・・・」

まるで母親が子供に子守歌を歌うように優しく。「汝が為にユピテル王の恩恵あれ、クーラ」

淡い光と共に完治した子供のキズと呪文を見て幸村は確信を得た。

「あのクソにやけ野郎の顔は殴れるようにできてるのか」

あの忌まわしき日に見た魔法使いが実在する人物だと知って腕がなると共に、魔法が実在すると知り驚きすぐにシスターの下へ歩み寄った。

「アンタ、ちょっと話聞きたいんだけどいい？」

「あ、はい。ではこちらへどうぞ」シスターに案内されきたのは一室の白い部屋だった。

「私の名前はハル・エルリックと申します。今回は何か相談事ですか？それとも入信？」

今から魔法について聞かれるとは思ってないのだろう熱心な瞳で幸村のことを見ている。

「オレが聞きたいのはアンタが魔法使いかどうかでことさ」

瞬間シスターハルの顔が驚きに満ちたようだったがなんとか平静を装っているようだ。

「魔法？何言ってるんですかそんなものゐるわけじゃないじゃないですか、からかつてるなら失礼させてもらいます」

足早に立ち去ろうとするシスターハルの肩を掴むと僅かに付着したコーラのシミ。

再び幸村は確信を得た。

「アンタは魔法使いだ」

面と向かって、眼と目を合わせて、言い放った一言が心揺さぶる。

「わかりました・・アナタもどうやら一般人ではないみたいですし、以後多少なりとも危険が及ぶかもしれないかもしれませんが覚悟があるならお話ししましょう。この世界の真実を」

四話（前書き）

なんかもうネギまのファンフィクションみたいになってきました。

四話

古くから存在すると言われている d r e a m s k i l l（夢の技術）、
魔法・・・

魔法とは空気中や水等、人間界に存在する万物に宿るエネルギーである魔力を呼吸することにより体内に取り込み魔法発動体を媒介させ発動させるものである。

魔法を発動するには呪文を詠唱する必要がある、詠唱することにより攻撃や補助、捕縛、回復と多種多様な魔法を使うことが出来る。
全ての魔法使いは呪文を詠唱する前に

「始動キー」という言葉としては意味を持たないパスワードのようなものを詠唱する必要があるが簡単な魔法は修練次第で省略できる。

ここまで魔法について説明してきたが、そもそもこの世界に魔法も、魔法使いなんてものも存在していなかった。

今から約二百年前に事件は起こる。

度重なる戦争による物理的衝撃や地殻変動等、様々な要因が良くも悪くも奇跡的に重なった結果、時空間に未曾有の亀裂と呼べるものが発生。

通常なら人間界とはわずかに位相を異とする魔法世界と人間界が物

△ソドウス・マギクス

理的に繋がり、世界11カ所に発生した亀裂を魔法的、科学的に制御することによってコチラの世界に初めて魔法使いは現れたのだ。

このゲートが完成するまでの間こちらの世界で魔法使いが存在せず、魔法がないのが当たり前であつたようにむこうの世界でもコチラの世界は

ムンドゥス・ウェトゥス
「旧世界」と呼ばれ伝説かお伽話と思われるか存在であつた。

今現在、世界中には1622人の魔法使いが生活しており、そのほとんどが人間界での援助や秩序の安定等、世のため人のために力を使うことを目的とし、表向きにはNGO団体に所属し活動している者が多い。

「これが私が知っている魔法使いについての全てです」

「なる程・・・ありがとうそれだけわかれば充分だ」

ドアを開け、教会の講堂までくると幸村の後を追ってシスターハルが駆け寄ってきた。

「待つて・・・ください。あ、アナタはこんな誰も信じてくれないようなことを聞いてどうするのですか？」

幸村はシスターハルに向けた背を振り向いた。

「オレをバカにした男を殴りに行く。例えば上司に呆れられて、同僚

にバカにされても、覚悟を決めた戦場で気まぐれに命を遊ばれた借りは返してやらなきゃ気がすまないんだよ」

「そうですか、それは酷く困難な道程になるでしょうが神のご加護が在らんことを切に願っております。」

「ありがとよ」

幸村が教会を出て行った後、

「くっ、ククククク、はっハッハッハッハ！」

広い教会の中を大笑い声が何度も、何度も兎玉する。

「な」にが借りは返さなきゃ気がすまないだ、今時そんな言葉久しぶりに聞いたよ！」

「そんなに笑ってやるなよ。彼だって本気なんだぜ？」

腹を抱えて笑うシスターハルの後ろ、聖母マリアの像に座るのは幸村が探した求めている飛行機ハイジャック事件の犯人である青年がいた。

「そんなこと無理だよムウ！僕の腹筋どんだけ鍛えさせる気なんだかアイツ」

シスターハルは笑い涙を拭うと頭につけていたカツラを外した。金髪のロングがショートの癖っ毛になったただけだかその容姿は可憐な

女性からイタズラ癖の治らない青年へと変わった。

「それにしてもあんな奴に僕たちのことあんな詳しく教えて良かったの？」

ムウは少し笑って飛び降りた。

「いいんだよハル。彼の行動パターンは君が引き止めてくれている間に入力済みだ。明日の昼にはもうこの世界は今とは大きくその思考を変えるだろう」

「明日か・・・楽しみだねムウ」

「ああ、楽しみだ」

ピピピ　ピピピ

ムウの時計のアラームが鳴り響く。

「帰ろ。ムウ」

ハルが指を鳴らすと教会にいた人間、木から落ちた少年。

果ては教会自体までが黒い粘土のようになりハルの影の中へと入っていった。

ムウ達が去った後今まで教会があった跡には汚らしい空き地だけが広がっていた。

五話

幸村は公安特務課の前にいた。

「失礼します」

「藤林・・・」

謹慎明けの幸村を見る課長の眼は、いまだに怒りに染まっていた。

「藤林。オマエが任務に失敗し、魔法使いなどと戯言を言って処分されてから二週間。すっかり頭の方は覚ましたんだろうな？」

「はい、」

幸村は静かに一つ返事をした。

「そうか、なら次の任務が入っている。大陸に持ち出された一部防衛システム情報の奪還だ。今回は・・・」任務説明をする課長の話が中断する共に一文字に結ばれた口。その目線の先には退職届けとかかれた封筒が置いてあった。

「なんの冗談だコレは？」

「冗談ではありません。私はこの仕事を、公安特務課を止めます」
幸村の眼は真剣そのもの。

「辞めてどうする気だ。」

「借りを返しにいきます」

「借り、だと・・・？藤林、貴様正気なのか！？魔法だと、魔法使いだとそんなものが実在するわけがないだろうが！！」

「実在します」

怒りと呆れに同時に出くわした課長は机を思い切り殴りつけた。

「なら証拠をもってこい。私が納得しうる確固たる証拠を！持ってくるまではコレは受け取らん！分かったらさっさと出ていけ！！」

課長室の前にはやっぱりかため息をつく幸村の姿があり、その手には新たな任務の詳細が書かれた紙があった。

「はあゝなかなか簡単にはいかないものだな」

幸村のように国防に関わり、一般人がとても手に入れられないような情報を多く持つ者達がその仕事を止めると言うことは、即ち、

「死」か、記憶の削除を伴うということである。

それを退職届け一つで済ませられる程の権力を持つのが藤林家であるがさすがに辞める理由が魔法使いを探しに行くからでは受理されるはずもなかった。

「ユツ……キ……！！！」

遠くの方から気の抜けるような呼び声がする。

黒い瞳に異邦人の血が混ざった赤茶色の髪の毛。

「探したよ！！ユツキー」

ダイビングジャンプで抱きついてくる男。

「ちよつ、どけヤマト！」

彼の名前は大和・S・ウォーカー。性格はうるさいが仕事は丁寧にこなす。隠密潜入が主だが暗器のスペシャリストでもある。

「ユツキー、ボクも魔法使い探すの手伝わせて！魔法使いは絶対に

いるよ！」

「な、オマエなんでそれを・・・？」

「さっき伊都織が言いふらしてたから」

「あの、クソやろう・・・殺すか」

「まあまあ取りあえず何か食べに行かない？」

「ああ、わかつ」

妙な感覚が幸村を襲った。

急に頭の中が白くなるような、思考が停止したような感覚に陥り、目の前をテレビの砂嵐のようなものが襲う。

「ユツキー？」

不思議に思ったヤマトに訪ねられて幸村の口から最初に出た言葉は、
「情報室に行くから・・・先いつててくれ・・・」
だった。

「別にいいけど、何しに行くの？」

「いいから・・・」

幸村が謎の奇行を始めた頃、アメリカ某所で悪巧みが開始されようとしていた。

「そろそろ時間だね」

そこにいたのはムウともう一人の女性。

「パル・バリ・バリーゾス・パリサイス。無坵むきょうくう区空羅」

女性の目の前に出たのは魔法物質でできた巨大な目玉だった。

「準備完了。いつでも行けるよムウ。」

「ありがとうリーシャ。あとは彼が動くのを待つだけだな」

日本

霧が晴れるように意識を取り戻した幸村が見た情報室は、いわゆる戦場だった。

「第三防壁突破！物凄い勢いで侵入してきます！」

オペレーターは必死にキーボードを叩き、室長も必死に指示を出している。

「物理的に電源を落としてみる！」

「ダメです、メインコンピューター完全掌握・・・やられました・・・」

情報室の人間は皆、信じられない。といった顔をしている。

「なんでオレ情報室に？」

訳も分らず一人取り残された幸村。

「くそ！ウチの防壁をこんな容易く突破するなんて、相手は本当に人間か！？」

ガンガンとデスクを殴る室長。すると真っ黒だったメインモニターに突如映像が映った。

「あれ？これちゃんと映ってる？」

映ったのはムウだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9015d/>

シノビックス

2010年10月10日03時08分発行